

未来を切り拓き 人間性豊かで たくましく生きる児童生徒の育成
～稲作体験をはじめとするキャリア学習とキャリアパスポートの作成を通して～

- 1 主題設定の理由
- 2 仮説
- 3 研究の計画
- 4 研究の実践と考察
- 5 研究の成果と課題

研究の概要報告

1 県内の自主的研究活動のとりくみ状況

本年度報告された研究は、中学校におけるキャリア教育・進路指導のとりくみ(1件)と、小学校におけるキャリア教育のとりくみ(1件)であった。2つの研究に共通する特徴的な点を以下の3つにまとめる。

一つめに、キャリア教育として新たなとりくみを始めるのではなく、これまでそれぞれの学校でとりくんできた教育活動をキャリア教育の視点から見直すという視点に立って全体計画が策定・実施されたことである。すでにあるキャリア教育の「宝」を洗い出し、それをつなげる、というキャリア教育のカリキュラム・マネジメントにおける重要ポイントをしっかり押さえたとりくみがなされていた。

二つめに、ゲストティーチャーの活用やPTAの協力など、外部資源の活用が積極的に行われていることがあげられる。キャリア教育を通して社会に開かれた教育課程が実践されていることの証であるといえる。

三つめに、キャリアパスポートの積極的な活用である。キャリアパスポートの導入から3年が経過し、課題も浮き彫りになったことを踏まえ、それぞれの学校の実情に合わせた改善と実践がなされていることが窺えた。

2 第74次教育研究愛知県集會にむけた課題

上記のような研究発表に対し、当日参加者からは多くの質問が出され、活発な議論がすすめられた。次年度の集會むけた課題として、議論の要点をいくつかあげておきたい。

児童・生徒の主体性をより引き出す工夫があると、よりよい実践になると考えられる。職場体験の体験先やゲストスピーカー候補者の選定に、児童・生徒の声を反映させる工夫がなされることを期待したい。

キャリアパスポートの活用を通じて可視化した学びの成果を児童・生徒と共有する方策を考えることも今後必要となる。基礎的・汎用的能力に代表されるキャリア教育を通して身につけさせたい力の獲得度合いは子どもたち自身は把握が難しい側面がある。キャリアパスポートの工夫などが期待される。

これらを通して、児童・生徒がキャリア教育を通じた自身の成長を実感し、今後の学びに繋げる展望をもてるようになることを期待したい。

(石嶺ちづる・喜田村次郎)

報告書のできるまで

第73次教育研究集会では、第72次教研まで積みあげられてきた成果をふまえ、各分会・各単組において、学校ぐるみの教育活動が続けられてきた。そして、その実践は各単組の集会で報告され、そこでの討論・助言をもとに、尾張ブロックから、合計2本のレポートが提出された。

本報告書は、「生き方指導」としての望ましい進路指導・キャリア教育を追究し、「自己の生き方を考える子どもの育成」をテーマに作成した。

助言者	石嶺ちづる（愛知教育大学）	喜田村次郎（尾北・岩倉中）
分科会教研推進委員	高橋 涼介（西尾・西尾中）	柘植 隆昭（名古屋・高杉中）
	楠元 勇也（愛知・長久手中）	星野 翔多（海部・佐織中）
	三宅 伸明（西春・熊野中）	河合 進（一宮・中部中）

未来を切り拓き 人間性豊かで たくましく生きる児童生徒の育成
 ～稲作体験をはじめとするキャリア学習とキャリアパスポートの作成を通して～

1 主題設定の理由

本校は、愛知県一宮市にあり、濃尾平野の北西部の田園地域に位置している。そのためか、素直で何事にも一生懸命頑張る生徒が多い一方で、マイペースな一面があり、自身の進路について主体的に考えることがあまりできていない。例年、卒業生の約7割が普通科に進学し、進路面談や保護者会でも将来の目標を明確に話すことができる生徒は少ない。

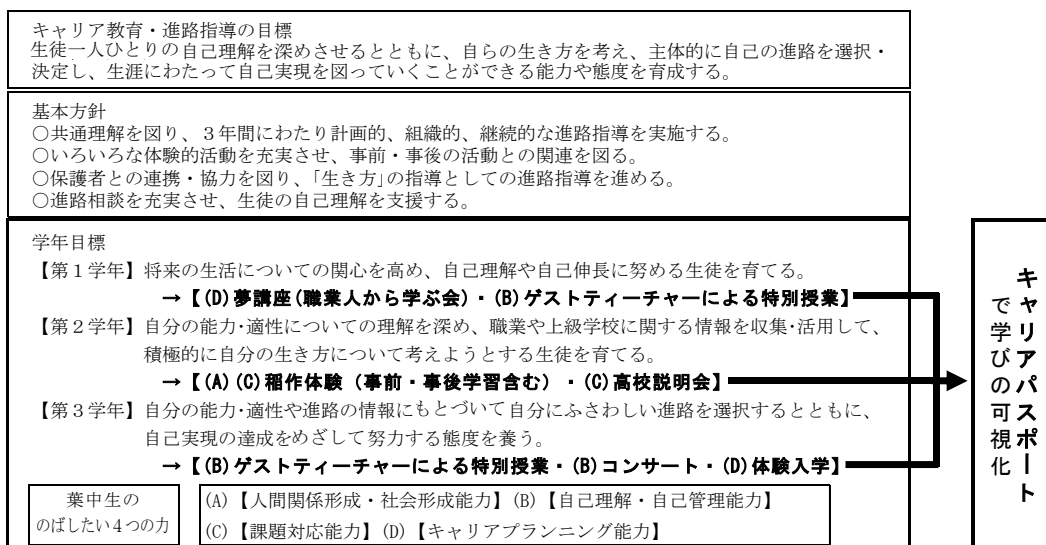
2年生を対象にしたアンケートによると、将来の夢をもっている生徒は50.6%、将来にむけて努力している生徒は30.8%、挑戦したいことがある生徒は76.7%であった。約半数の生徒は将来の夢や目標をまだもっていないことから、将来にむけて何を努力したらよいかかわかっていないのではないかと考えられる。

そこで、各学年の実態に応じた実践にとりくむことにより、将来の自分像をイメージし、主体的な進路選択につながると考え、次の仮説を立て、検証を行う。

2 仮説

- (1) 本校の伝統行事である稲作体験を通して仕事の意義や農業に関連する職業の幅の広さを知ったり、ゲストティーチャーによる特別授業でさまざまな生き方を知ったり、上級学校について学ぶ機会を得たりすることで、将来の自分像を想像することにつながるであろう。
- (2) キャリアパスポートを学校で統一したものとし、学びや成長の記録を中学校3年間で作成することで、成長の過程を可視化でき、将来の進路や職業についての目標を明確化できるであろう。

3 研究の計画（学校経営案より）



本校の教育目標
 向上心と夢をもち、心豊かにたくましく生きる生徒の育成
めざす生徒像
 夢や希望の実現にむけ、あきらめず努力を続けることのできる生徒

4 研究の実践と考察

(1) 夢講座（1年生）



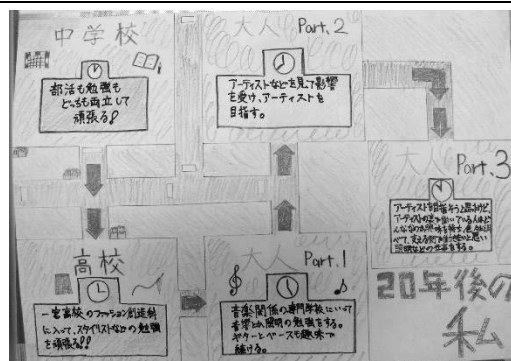
夢講座とは、さまざまな職種の地域の方を講師として招き、仕事について、経験をもとに生徒に話していただく行事である。このとりくみは、実際の職業について直接知り、講師の方々の経験や成功体験を聞くことで、主体的に将来の目標設定をすることができる。

2022年度は、保険営業（元プロ野球選手）、調理師、消防士、獣医師、製造業、建築士、看護師の7人の方をお招きした。生徒は、7つの講座から2つ選び、働くことの喜びや厳しさや、講師の方の人生観などにふれ、自らの生き方を考えた。また、興味をもった講座を複数選択することで、各分野の専門的な話を聞き、見聞を広めることができた。講座終了後には、生徒自らが学んだことだけでなく、将来の自分像をレポートにまとめ、将来設計を考えさせることができた。また、廊下への掲示により、周りの生徒にも知らせることで、情報を共有することができた。特に、将来設計のレポート「20年後の自分」を作成したことで、目標とする将来像に到達するための進路を調べたり考えたりすることができた。

以下、生徒の感想の一例を以下に紹介する。

- ・調理師として大切なのは、衛生面、スピード、相手に合った料理であることを知りました。まな板を洗うときは、味が変わってしまわないように、消毒するのではなく塩水を使うそうです。自分の将来の夢はパティシエなので、今日は参考になる話がたくさん聞けてうれしかったです。
- ・看護師の仕事はとても大変だけど、やりがいのある仕事だとわかりました。また、「看護師」という仕事から、さまざまなことや人につながっていくことも学びました。私は小学生の頃から看護師になりたいと考えていたので、「人を見る」ことを意識して、これから生活していきたいです。
- ・飛行機は設計が難しく、造るのにすごく時間がかかると聞きました。それでも、数ミリの誤差が事故につながってしまうので、責任の重い大変な仕事だと感じました。また、エンジニアとして物を造ること以上に、その工程の中で人と人をつなぐことが大切だということも学びました。

右に、「20年後の自分」レポートの一例を紹介する。



(2) 稲作体験 (2年生)



葉栗中学校の伝統行事として、2年生で稲作体験を行っている。この行事は、JAの協力のもと、田植え、稲刈り、脱穀、精米後の米の袋詰めを1年通して行う。田植えの事前指導では、JA職員の方に特別授業を行っていただき、農業の意義や目的について学び、田植えにむけて意識を高めた。特別授業では次の内容を講義していただいた。

- ・地産地消のとりくみの一つとして、一宮市の学校給食では一宮・稲沢産「あいちのかおり」を使用し、ソフト麺、牛乳は100%愛知県産を使用している。
- ・農家を増やすとりくみとして、JAと一宮市がタイアップして「農業塾」を実施している。農業従事者の高齢化と後継者不足、担い手の不足による農地の遊休化を少しでも解消し、農業の明るい未来のため農業塾(2008年8月に開校)では、趣味で始める「生きがい農業コース」、専業農家をめざす「担い手育成コース」を指導している。
- ・食料自給率の現状と、低下による影響について。
- ・JAの仕事と、社会的役割・責任について。

事前指導を終えたあとの意識調査は次の通りである。

【事前指導後の意識調査】

- ・今回の田植えの事前指導で、農業について理解が深まった 82.1%
- ・今回の田植えの事前指導で、田植え体験が楽しみになった 90.4%

【田植え体験後の意識調査】

- ・今回の田植えで、農業について理解が深まった 92.5%
- ・今回の田植えで、農業の大変さを実感できた 95.2%
- ・今後、機会があれば農業(プランター栽培含む)にチャレンジしたいと思った 76.0%

以上のように、事前指導を行った後に田植え体験を行うことで、農業についての理解が深まり、農業に対する興味関心をもたせることに効果的である結果となった。

10月に稲刈り、11月に脱穀、2月に精米した米の仕分けを行った。稲作の一連の作業を体験して、農業の大変さや、お米のありがたさを改めて感じる事ができた。また、この行事で開校当初からの葉栗中の伝統をつなぐことができた。

生徒の感想の一例を以下に紹介する。

- ・稲刈りを終えて、私は機械を使わないで行う農業の大変さを知ることができました。また、新しい経験をする事ができてよかったです。
- ・稲作体験を終えて、機械化が進むなか、機械を使わない農作業という貴重な体験ができました。同じグループの仲間とコミュニケーションをとりながら行い、初めてやった稲作はとてもよい経験となりました。

(3) 高校説明会（2年生）



例年、本校の周辺及び卒業生が多く進学している高校の先生にお越しいただき、学科の特色を中心に話を聞く会を設けている。2022年度は公立高校6校、私立高校3校の先生をお招きした。生徒は、9校の中から3校選び、選んだ高校の特徴や校風などを聞いてレポートを作成した。生徒自身の進路希望を決定していくにあたり、上級学校の様子を知り、自分の進路について、より具体的に考えるきっかけとなる機会としている。この行事では、次の点を取り決めごととした。

- ・生徒は普通科と専門学科をそれぞれ必ず選択すること
- ・公立高校と私立高校をそれぞれ必ず選択すること
- ・参加を希望する保護者には、自由参観ではなく、生徒が選択した学校と同じところを参観していただく

このことで、異なる学科の特色や、公立高校と私立高校の違いについて知ることで、自分の興味や将来の目標に合った進路を選択する際の判断材料として、多面的多角的な見方をすることができた。また、パンフレットやインターネット上の情報だけではなく、実際の高校で教えている先生から話を聞くことで、具体的な高校生活をイメージしたり、目標をもったりすることにつながった。また、保護者は生徒と同じ学校に参加したことで、家庭内で進路の話をするきっかけとすることができた。

(4) ゲストティーチャーによる特別授業・コンサート（1年生・3年生）

① 産婦人科医・助産師による特別授業（1年生・3年生）



1年生では助産師を、3年生では産婦人科医をそれぞれ特別講師として、「いのちの授業」を行った。この授業では、妊娠や出産という生命の始まりや、子の成長をテーマとして、助産師や産婦人科医の経験や考え方を聞くことで、人の成長や生命の尊さについて学ぶことができた。また、助産師や産婦人科医としての仕事には、母子や患者の健康や生命に対して責任が求められていることを知り、医療従事者の仕事の社会的意義ややりがいについて学ぶことができた。

生徒の感想の一例を以下に紹介する。

- ・たくさんの人の支えがあって生きてこられたと実感しました。いのちの授業は、将来のために役立っていくと感じました。
- ・私は将来看護師になりたいと思っています。今回の授業で、とても責任が重い仕事だと感じましたが、その分やりがいがある仕事だと思いました。
- ・僕は医者になりたいので、今回の授業はとても楽しみでした。重い病気や難しい手術でも、治療できる医者になりたいと思いました。

② 合唱作曲家によるコンサート（3年生）



「いのちと夢のコンサート」という演題で、合唱作曲家を特別講師に招き、コンサートを行った。講師の方は、教育実習で出会った指導教官の、命を燃やして仕事をする姿に感銘を受けたり、ホスピスでのコンサートでは最後まで生きる喜びをかみしめながら過ごしている患者に勇気をもたらしたりした経験から、コンサートを通して全国の子どもたちに「生き方」を伝えている。ご本人の経験や今までの出会いから語っていただき、夢や目標に向かって努力することの大切さや芸術を通した生き方を知ることができた。また、多くの困難や障害に直面しながらも夢を追い求めてきた話は、生徒たちに挑戦する意欲や困難を乗り越える力を培う上で非常に効果的であり、自己肯定感を高め、目標に挑戦する気持ちづくりにつなげることができた。

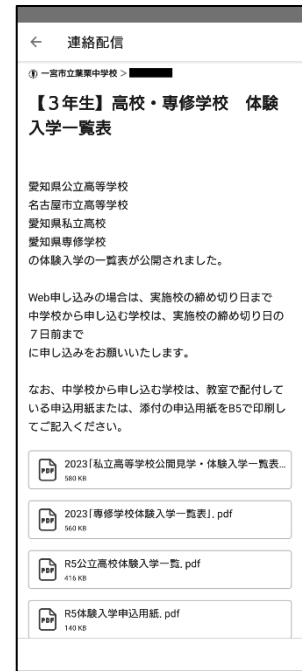
生徒の感想の一例を以下に紹介する。

- ・今まで普段何気なく聴いていた音楽には、何か絶対聴いている人に伝えたい気持ちやメッセージがあるんだと知ることができました。いろいろなところに旅をして、いろいろな人に感動を与えられてとてもかっこいいと思いました。
- ・これまでの活動を通して、たくさんの人たちとかかわり合ってきた凄い人なので、今日会えて一緒に歌えたことを誇りに思います。
- ・コンサートを聴いて、とても感動しました。また、昔の話を聞いて、苦しいときもあきらめずやり続けたら、いいことが必ずあるとわかりました。僕も苦しくてもあきらめず、やり続けることにします。そして、音楽には人を元気にする力がとても強くあると思いました。
- ・歌っている姿や話を聞いて、私も将来、たくさん冒険して、いろいろな人と出会ってみたいなどと思いました。自分は同じように歌えなくても、自分なりの方法で人を笑顔にできる職業に就きたいです。自分を信じて、これからも将来のために頑張っていこうと思えました。

(5) 体験入学（3年生）

上級学校の体験入学や見学会、説明会への参加は、具体的な志望校選択にむけて効果的な手段である。本校では、志願する可能性のある学校には必ず参加するように指導している。体験入学に関する情報は、一覧表を配付するだけでなく、保護者連絡アプリで配信した。それにより、プリントでは保護者に情報が行き渡らないことがあったが、保護者連絡アプリでの配信で登録しているすべての保護者に周知することができた。

また、月2回程度、学年集会で進路について進路指導主事が話をする機会をつくり、意識を高めた。5月までは体験入学への参加申し込みは少なかったが、7月には総数で300を超える申込数があり、夏休み中に一人当たり平均2校以上参加する結果となった。



(6) キャリアパスポート（全学年）

愛知県では、小・中学校から高等学校まで、また特別支援学校を含めて、系統的・継続的に、それぞれの児童生徒の発達段階に応じて、社会的・職業的自立の基盤となる能力や態度の育成の一助とするために、愛知県キャリア教育ノート「夢を見つけ夢をかなえる航海ノート」を公開している。本校では、この様式を活用し、キャリアパスポートを全校統一様式で作成している。



キャリアパスポートを全校統一様式で作成している。キャリア教育として位置づけている行事で学んだことを記入し、3年間を通して完成させている。統一様式とすることで、生徒がキャリアパスポートを読み返して振り返ることができ、自分自身の成長を知ったり、自己理解を深めたりすることができた。特に、3年間のキャリア教育のとりくみを時系列でまとめさせることで、生徒が学んだ学習内容や活動の成果を可視化する手段として効果的であった。

また、高校へ引き継ぐことを前提で1年生から作成しているため、生徒たちは学んだことを丁寧にまとめるとともに、将来にむけての目標についてもまとめる姿があった。掲示用の行事の感想よりも、的確にまとめる力も培うことができた。

5 研究の成果と課題

夢講座や稲作体験、高校説明会、体験入学は今までも学校行事としてとりくんできた。しかし、それらにキャリア教育としてのつながりが薄く、生徒たちも一つ一つ違う行事としての認識をもってとりくんできた。

そこで、本研究では、それぞれの行事をキャリア教育の視点でつなげるために、統一したキャリアパスポートを作成し、先に示した行事全てにキャリア教育の視点をもたせた。それにより、生徒は将来にむけて真剣に学ぼうとする気持ちを高めるとともに、学んだことをポートフォリオとしてまとめることで自己理解・自己分析につなげることができた。さらに、教員もキャリア教育の視点で指導にあたることができた。また、本校の伝統行事である稲作体験を通して、事前指導から事後指導まで一貫して指導をしたことで、仕事の意義や農業に関連する職業の幅の広さを知ることができた。また、ゲストティーチャーによる特別授業でさまざまな生き方を知ったり、上級学校について学ぶ機会を得たりしたことで、将来の自分像を想像し、目標設定につなげることができた。また、2年生時と3年生時に行ったアンケート結果は右の通りとなった。本研究により、将来にむけて意識が向上したと考えられる。また、キャリアパスポートの作成や各学年で実施したキャリア学習は、将来の目標の設定や、今後の進路を考えるにあたって有効的であると生徒自身も感じていることがわかった。

しかし、これらのとりくみにより進路実現にむけた意識の向上につながったが、将来性を見越した進路選択にはまだつなげることができていない。そのため、普通科を志望し、さらにその後の進路先をイメージできている生徒は多くはない。それは、保護者をはじめとする家族が多様な進路先を知らないことに原因があるのではないかと考える。本研究では学校行事の「点」をキャリア教育という視点によりつなぎ「線」として、生徒と教員の意識のベクトルを同じ方向に合わせることができた。今後は、保護者への情報提供の仕方や、保護者参加型のキャリア教育を模索していきたい。

将来の夢を持っている

(2年)50.6%→(3年)66.9%

将来にむけて努力している

(2年)30.8%→(3年)73.3%

挑戦したいことがある

(2年)76.7%→(3年)78.5%

キャリアパスポートは今までの学習

を振り返る上で役立った

(3年)85.9%

キャリア学習は進路を考えるうえで

ためになった

(3年)94.1%